

Oracle® Database

Client クイック・インストール・ガイド

10g リリース 2 (10.2) for Linux on POWER

部品番号 : B25809-01

原典情報 : B25150-01 Oracle Database Client Quick Installation Guide 10g Release 2 (10.2) for Linux on POWER

2005 年 12 月

このマニュアルでは、Linux on POWER システムに Oracle Database Client をすばやくインストールする方法を説明します。次の内容について説明します。

1. このマニュアルの概要
2. root としてのシステムへのログイン
3. ハードウェア要件の確認
4. ソフトウェア要件の確認
5. 必須のオペレーティング・システム・グループおよびユーザーの作成
6. Oracle ベース・ディレクトリの作成
7. oracle ユーザーの環境の構成
8. 製品ディスクのマウント
9. Oracle Database Client のインストール
10. インストール後の作業
11. ドキュメントのアクセシビリティについて
12. サポートおよびサービス

1 このマニュアルの概要

注意： このマニュアルでは、Oracle ソフトウェアがインストールされていないシステムに Oracle Client をインストールする方法を説明します。このシステムにすでに Oracle ソフトウェアがインストールされている場合のインストールの詳細は、『Oracle Database Client インストール・ガイド for Linux on POWER』を参照してください。

このマニュアルでは、Oracle ソフトウェアがインストールされていないシステムに Oracle Database Client をデフォルトでインストールする方法を説明します。次のインストール・タイプのインストール方法を説明します。

- **管理者：**アプリケーションを、ローカル・システムまたはリモート・システムの Oracle Database インスタンスに接続できます。また、Oracle Database を管理するためのツールが提供されます。
- **ランタイム：**アプリケーションを、ローカル・システムまたはリモート・システムの Oracle Database に接続できます。
- **InstantClient:** Oracle Call Interface (OCI)、Oracle C++ Call Interface (OCCI)、Pro*C または Java データベース接続 (JDBC) OCI アプリケーションに必要な共有ライブラリのみがインストールできます。このインストール・タイプは、他の Oracle Database Client のインストール・タイプに比べ、非常に少ないディスク領域で済みます。

関連項目： Instant Client 機能の詳細は、『Oracle Call Interface プログラマーズ・ガイド』を参照してください。

このマニュアルでは、「カスタム」インストール・タイプについては説明しません。

追加インストール情報の入手先

Oracle Database Client のインストールの詳細は、『Oracle Database Client インストール・ガイド for Linux on POWER』を参照してください。

このマニュアルは、製品ディスクに含まれています。アクセスするには、Web ブラウザで、インストール媒体のトップレベル・ディレクトリ内にある `welcome.htm` ファイルを開き、次に「ドキュメント」タブを開きます。

2 root としてのシステムへのログイン

Oracle Database Client をインストールする前に、root ユーザーとしていくつかのタスクを実行する必要があります。root ユーザーとしてログインするには、次の手順の1つを実行します。

注意： ソフトウェアは、X Window System ワークステーション、X 端末、または X サーバー・ソフトウェアがインストールされている PC またはその他のシステムからインストールする必要があります。

- ソフトウェアを X Window System ワークステーションまたは X 端末からインストールする場合、次の手順を実行します。

1. X 端末 (xterm) など、ローカル・ターミナル・セッションを開始します。
2. ソフトウェアをローカル・システム以外にインストールする場合、リモート・ホストの X アプリケーションをローカル X サーバーに表示できるように、次のコマンドを入力します。

```
$ xhost fully_qualified_remote_host_name
```

例：

```
$ xhost somehost.us.acme.com
```

3. ソフトウェアをローカル・システム以外にインストールする場合、ssh、rlogin または telnet コマンドを次のように使用して、ソフトウェアをインストールするシステムに接続します。

```
$ telnet fully_qualified_remote_host_name
```

4. root ユーザーとしてログインしていない場合は、次のコマンドを入力して、ユーザーを root に切り替えます。

```
$ su - root
password:
#
```

- X サーバー・ソフトウェアがインストールされた PC または他のシステムからソフトウェアをインストールする手順は、次のとおりです。

注意： このタスクの実行方法の詳細は、必要に応じてご使用の X サーバーのドキュメントを参照してください。使用している X サーバー・ソフトウェアによっては、タスクの実行順序が異なる場合があります。

1. X サーバー・ソフトウェアを起動します。
2. X サーバー・ソフトウェアのセキュリティ設定を構成して、リモート・ホストの X アプリケーションをローカル・システム上で表示できるようにします。
3. ソフトウェアをインストールするリモート・システムに接続し、そのシステムで X 端末 (xterm) などのターミナル・セッションを開始します。
4. リモート・システムに root ユーザーとしてログインしていない場合は、次のコマンドを入力して、ユーザーを root に切り替えます。

```
$ su - root
password:
#
```

3 ハードウェア要件の確認

システムは、少なくとも次のハードウェア要件を満たしている必要があります。

- 256 MB の物理 RAM
- 次の表に、インストールされている RAM と構成されているスワップ領域の要件との関係を示します。

RAM	スワップ領域
256MB 以下	RAM のサイズの 3 倍
257 ~ 512MB	RAM のサイズの 2 倍
513 ~ 726MB	RAM のサイズの 1.5 倍
727MB 以上	RAM のサイズの 0.75 倍

- クライアント・インストールに必要な TMP 領域の最小値は、115MB です。/tmp ディレクトリの最小ディスク領域要件は、選択したインストール・タイプによって異なります。次の表に、インストール・タイプごとの /tmp ディレクトリの最小ディスク領域要件を示します。

インストール・タイプ	ディレクトリに必要なディスク領域 (MB)
管理者	835
ランタイム	470
カスタム (すべてのコンポーネントを選択した場合)	765
InstantClient	120

- 34 MB ~ 820 MB の Oracle ソフトウェア用のディスク領域 (インストール・タイプにより異なる)

システムがこれらの要件を満たしていることを確認するには、次の手順を実行します。

1. 物理 RAM のサイズを調べるには、次のコマンドを入力します。

```
# grep MemTotal /proc/meminfo
```

システムにインストールされている物理 RAM のサイズが指定した値に満たない場合は、追加のメモリーをインストールしてから続行してください。

2. 構成されているスワップ領域のサイズを調べるには、次のコマンドを入力します。

```
# grep SwapTotal /proc/meminfo
```

追加のスワップ領域の構成方法は、必要に応じてご使用のオペレーティング・システムのマニュアルを参照してください。

3. /tmp ディレクトリ内の空きディスク領域の量を調べるには、次のコマンドを入力します。

```
# df -k /tmp
```

/tmp ディレクトリで使用できるディスク領域が 400MB 未満の場合は、次の手順の 1 つを実行します。

- ディスク領域要件を満たすように、/tmp ディレクトリから不要なファイルを削除します。
 - oracle ユーザーの環境を設定する場合（後述します）は、TEMP および TMPDIR 環境変数を設定します。
 - /tmp ディレクトリを含むファイル・システムを拡張します。ファイル・システムの拡張方法は、必要に応じてシステム管理者に確認してください。
4. システムで使用できる空きディスク領域の量を調べるには、次のコマンドを入力します。

```
# df -k
```

次の表に、各インストール・タイプにおけるソフトウェア・ファイルのディスク領域の要件（概算）を示します。

インストール・タイプ	ソフトウェア・ファイルの要件 (MB)
InstantClient	130
管理者	850
ランタイム	495
カスタム (最大値)	790

注意： Instant Client の Instant Client Light コンポーネントのみを構成する場合は、関連するファイルを格納するために 34MB のディスク領域が必要です。

5. システム・アーキテクチャがソフトウェアを実行できるかどうかを判断するには、次のコマンドを入力します。

```
# grep "model name" /proc/cpuinfo
```

このコマンドにより、プロセッサ・タイプが表示されます。プロセッサのアーキテクチャが、インストールする Oracle ソフトウェアのリリースと一致していることを確認します。予想していた出力が表示されない場合、このシステムにソフトウェアをインストールすることはできません。

4 ソフトウェア要件の確認

システムは、少なくとも次のソフトウェア要件を満たしている必要があります。

項目	要件
オペレーティング・システム	オペレーティング・システムのバージョンが次のいずれかであること。 <ul style="list-style-type: none">■ Red Hat Enterprise Linux AS/ES 4.0 (Update 1 以上)■ SUSE Linux Enterprise Server 9.0 (SP2 以上)
カーネル・バージョン	次のカーネル・バージョン (またはそれ以上) がシステムで稼働していること。 Red Hat Enterprise Linux 4.0 の場合 2.6.9-11.EL SUSE Linux Enterprise Server 9.0 の場合 2.6.5-7.191-pseries64
パッケージ	次のパッケージ (またはそれ以上のバージョン) がインストールされていること。 Red Hat Enterprise Linux 4.0 の場合 Gmake-3.80-5 gcc-3.4.3-22.1 gcc-ppc32-3.4.3-22.1 gcc-c++-3.4.3-22.1 gcc-c++-ppc32-3.4.3-22.1 glibc-2.3.4-2.9 glibc-2.3.4-29 (64-Bit) libgcc-3.4.3-9.EL4 libgcc-3.4.3-9.EL4.ppc64.rp libstdc++-3.4.3-9.EL4 libstdc++-devel-3.4.3-9.EL4 libaio-0.3.103-3 libaio-0.3.103-3 (64-Bit) libaio-devel-0.3.103-3 (64-Bit) compat-libstdc++-33-3.2.3-47.3 binutils-2.15.92.0.2-13 Red Hat Enterprise Linux 4.0 の場合 gcc-3.3.3-43.34 gcc-64bit-9-200505240008 gcc-c++-3.3.3-43.34 glibc-2.3.3-98.47 glibc-64bit-9-200506062240 libgcc-3.3.3-43.34 libgcc (64-bit) 9-200505240008 libstdc++-3.3.3-43.34 libstdc++-devel-3.3.3-43.34 libaio-0.3.102-1.2 libaio-64bit-9-200502241152 libaio-devel-0.3.102-1.2 libaio-devel-0.3.102-1.2 (64-bit) Gmake-3.80-184.1 binutils-2.15.90.0.1.1-32.10 binutils-64bit-9-200505240008

項目	要件
Oracle Messaging Gateway	<p>Oracle Messaging Gateway は、Oracle Streams Advanced Queuing (AQ) と次のソフトウェアとの統合をサポートしています。</p> <p>IBM WebSphere MQ V5.3、クライアントおよびサーバー：</p> <p>MQSeriesClient MQSeriesServer MQSeriesRuntime</p>
C/C++ ランタイム環境	<p>次のリンクから、IBM XL C/C++ Advanced Edition V7.0.1 for Linux Runtime Environment Component をライセンス要件なしで無償でダウンロードします。</p> <p>http://www-1.ibm.com/support/docview.wss?rs=2030&context=SSJT9L&context=SSENT9&context=SSEP5D&dc=D400&dc=D410&dc=D420&dc=D430&q1=Run-time+Environment+Component&uid=swg24007906&loc=en_US&cs=utf-8&lang=en</p> <p>このリンクから、XL Optimization Libraries コンポーネントをダウンロードする必要もあります。</p>
PL/SQL のネイティブ・コンパイル、Pro*C/C++、Oracle Call Interface、Oracle C++ Call Interface および Oracle XML Developer's Kit (XDK)	<p>該当のディストリビューションに示されていたバージョンの GNU C および C++ コンパイラは、これらの製品で使用できるようにサポートされています。</p> <p>注意： IBM XL C/C++ コンパイラ・バージョン 7.0 以上もサポートされています。</p> <p>Oracle ユーザー・アプリケーションに IBM XL C/C++ Advanced Edition V7.0.1 for Linux on POWER コンパイラを使用する場合、V7.0.1 以上のバージョンである必要があります。ダウンロード情報およびアップデートについては、次のリンクを参照してください。</p> <p>http://www-306.ibm.com/software/awdtools/xlcpp/features/linux/</p> <p>IBM XL C/C++ Advanced Edition V7.0.1 for Linux on POWER コンパイラがインストールされている場合は、IBM XL C/C++ Advanced Edition V7.0.1 for Linux Runtime Environment Component が自動的にインストールされます。</p>
Oracle JDBC/OCI ドライバ	<p>Oracle JDBC/OCI ドライバでは、次のオプションの JDK バージョンを使用できますが、インストールには不要です。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ IBM Java 1.4.2 64-bit (SR1a) 以上 ■ IBM Java 1.4.2 32-bit (SR1a) 以上 ■ IBM Java 1.3.1 32-bit (SR8) 以上 (SLES 9 の場合のみ) <p>注意： このリリースでは、デフォルトで IBM Java 1.4.2 32-bit がインストールされます。</p>

関連項目： GNU Compiler Collection をプライマリ・コンパイラとして使用する場合のプライマリ・コンパイラの構成の詳細は、『Oracle Database インストール・ガイド for Linux on POWER』を参照してください。

システムがこれらの要件を満たしていることを確認するには、次の手順を実行します。

1. インストールされているオペレーティング・システムのバージョンを調べるには、次のコマンドを入力します。

```
# cat /etc/issue
```

注意： この項で前述したディストリビューションおよびバージョンのみがサポートされます。その他のバージョンの Linux にソフトウェアをインストールしないでください。

2. 必要なカーネルがインストールされているかどうかを調べるには、次のコマンドを入力します。

```
# uname -r
```

次に、Red Hat Enterprise Linux 3.0 システムでこのコマンドを実行して取得されたサンプル出力を示します。

```
2.6.9-11.EL
```

この例では、出力にシステムのカーネル・バージョン (2.6.9) およびエラータ・レベル (11.EL) が示されています。

カーネル・バージョンがこの項で前述した要件を満たしていない場合は、カーネルの更新の入手とインストールについて、ご使用のオペレーティング・システムのベンダーにお問い合わせください。

3. 必要なパッケージがインストールされているかどうかを調べるには、次のコマンドを入力します。

```
# rpm -q package_name
```

必要なパッケージがインストールされていない場合、またはバージョンが必要なバージョン未満の場合は、ご使用の Linux の配布媒体からパッケージをインストールするか、必要なパッケージを Linux のベンダーの Web サイトからダウンロードしてください。

5 必須のオペレーティング・システム・グループ およびユーザーの作成

システムに次のローカル・オペレーティング・システム・グループおよびユーザーが存在している必要があります。

- Oracle インベントリ・グループ (oinstall)
- Oracle ソフトウェア所有者 (oracle)

このグループおよびユーザーがすでに存在しているかどうかを調べる場合、または必要に応じて作成する場合は、次の手順を実行します。

1. oinstall グループが存在しているかどうかを調べるには、次のコマンドを入力します。

```
# more /etc/oraInst.loc
```

このコマンドの出力結果が oinstall グループ名を示している場合、そのグループはすでに存在しています。

oraInst.loc ファイルが存在する場合、このコマンドの出力結果は次のようになります。

```
inventory_loc=/u01/app/oracle/oraInventory
inst_group=oinstall
```

inst_group パラメータは、Oracle インベントリ・グループの名前 (oinstall) を示しています。

2. 必要に応じて次のコマンドを入力し、oinstall グループを作成します。

```
# /usr/sbin/groupadd oinstall
```

3. oracle ユーザーが存在し、正しいグループに属しているかどうかを調べるには、次のコマンドを入力します。

```
# id oracle
```

oracle ユーザーが存在する場合は、このコマンドにより、ユーザーが属しているグループに関する情報が表示されます。出力結果は次のようになります。oinstall がプライマリ・グループであることが示されています。

```
uid=440(oracle) gid=200(oinstall) groups=201(dba),202(oper)
```

4. 必要に応じて、次の処理の1つを実行します。

- oracle ユーザーが存在していてもプライマリ・グループが oinstall ではない場合、次のようなコマンドを入力します。-g オプションは oinstall をプライマリ・グループに指定し、-G オプションは oracle ユーザーが所属している既存のグループを指定します。

```
# /usr/sbin/usermod -g oinstall -G dba oracle
```

- oracle ユーザーが存在しない場合は、次のコマンドを入力して作成します。

```
# /usr/sbin/useradd -g oinstall [-G dba] oracle
```

このコマンドにより oracle ユーザーが作成され、次が指定されます。

- プライマリ・グループとして oinstall
- オプションのセカンダリ・グループとして dba

5. 次のコマンドを入力して、oracle ユーザーのパスワードを設定します。

```
# passwd oracle
```

6 Oracle ベース・ディレクトリの作成

注意： Oracle ベース・ディレクトリがシステムにすでに存在する場合は、この手順を実行しないでください。oinstall グループが存在すると判断した場合、通常、Oracle ベース・ディレクトリは Oracle インベントリ・ディレクトリの親ディレクトリです。

Oracle ベース・ディレクトリを作成するには、次の手順を実行します。

1. 次のコマンドを入力して、マウントされているすべてのファイル・システムに関する情報を表示します。

```
# df -k
```

このコマンドにより、システムにマウントされているすべてのファイル・システムに関する情報が表示されます。次のような情報があります。

- 物理デバイス名
- ディスク領域の合計量、使用量および使用可能な量
- そのファイル・システムのマウント・ポイント

2. 表示された情報から、この項で前述したディスク領域要件を満たす 1 つまたは 2 つのファイル・システムを特定します。

3. 特定した各ファイル・システムのマウント・ポイント・ディレクトリ名を書き留めます。

4. 次のようなコマンドを入力して、特定したマウント・ポイント・ディレクトリに推奨サブディレクトリを作成し、適切な所有者、グループおよび許可を設定します。

```
# mkdir -p /mount_point/app/oracle_sw_owner
# chown -R oracle:oinstall /mount_point/app/oracle_sw_owner
# chmod -R 775 /mount_point/app/oracle_sw_owner
```

たとえば、特定したマウント・ポイントが /u01 で、oracle が Oracle ソフトウェア所有者のユーザー名の場合、推奨される Oracle ベース・ディレクトリ・パスは次のようになります。

```
/u01/app/oracle
```

5. oracle ユーザーの環境を構成する場合、作成した Oracle ベース・ディレクトリを指定するように ORACLE_BASE 環境変数を設定します。

7 oracle ユーザーの環境の構成

Oracle Universal Installer は、oracle アカウントから実行します。ただし、Oracle Universal Installer を起動する前に、oracle ユーザーの環境を構成する必要があります。環境を構成するには、次の設定が必要です。

- シェル起動ファイルで、デフォルトのファイル・モード作成マスク (umask) を 022 に設定します。
- DISPLAY 環境変数を設定します。

oracle ユーザーの環境を設定するには、次の手順を実行します。

1. X 端末 (xterm) など、新しいターミナル・セッションを開始します。
2. X Window アプリケーションがこのシステムで表示できることを確認するために、次のコマンドを入力します。

```
$ xhost fully_qualified_remote_host_name
```

3. 次の手順の 1 つを実行します。

- ターミナル・セッションがソフトウェアのインストール先のシステムに接続されていない場合は、そのシステムに oracle ユーザーとしてログインします。
- ターミナル・セッションがソフトウェアのインストール先のシステムに接続されている場合は、ユーザーを oracle に切り替えます。

```
$ su - oracle
```

4. oracle ユーザーのデフォルトのシェルを調べるには、次のコマンドを入力します。

```
$ echo $SHELL
```

5. oracle ユーザーのシェル起動ファイルをテキスト・エディタで開きます。

注意： Red Hat Linux では、.bash_profile は Bash シェルの起動ファイルです。

- Bourne シェル (sh)、Bash シェル (bash)、または Korn シェル (ksh) の場合：

```
$ vi .bash_profile
```

- C シェル (csh または tcsh) の場合：

```
% vi .login
```

6. シェル起動ファイルで次の行を入力または編集して、デフォルトのファイル・モード作成マスクに値 022 を指定します。

```
umask 022
```

7. ORACLE_SID、ORACLE_HOME または ORACLE_BASE 環境変数がファイルで設定されている場合は、ファイルから対応する行を削除します。

8. ファイルを保存して、エディタを終了します。

9. シェルの起動スクリプトを実行するには、次のコマンドを入力します。

- Bash シェルの場合：

```
$ . ./bash_profile
```

- Bourne または Korn シェルの場合：

```
$ . ./profile
```

- C シェルの場合：

```
% source ./login
```

10. ソフトウェアのインストール先がローカル・システムではない場合は、ローカル・システムに表示するために、次のようなコマンドを入力して、X アプリケーションに指示します。

- Bourne、Bash または Korn シェルの場合：

```
$ DISPLAY=local_host:0.0 ; export DISPLAY
```

- C シェルの場合：

```
% setenv DISPLAY local_host:0.0
```

この例で `local_host` は、Oracle Universal Installer の表示に使用するシステム (ワークステーションまたは PC) のホスト名または IP アドレスです。

11. ハードウェア要件を確認したときに /tmp ディレクトリの空きディスク領域が不十分と判断した場合は、必要な空き領域があるファイル・システムを特定して、TEMP および TMPDIR 環境変数を次のように設定します。

- a. `df -k` コマンドを使用して、空き領域が十分にある適切なファイル・システムを特定します。
- b. 必要に応じて、次のようなコマンドを入力して、特定したファイル・システム上に一時ディレクトリを作成し、そのディレクトリに適切な許可を設定します。

```
$ su - root
# mkdir /mount_point/tmp
# chmod a+wr /mount_point/tmp
# exit
```

- c. 次のようなコマンドを入力して、TEMP および TMPDIR 環境変数を設定します。

Bourne、Bash または Korn シェルの場合：

```
$ TMP=/mount_point/tmp
$ TMPDIR=/mount_point/tmp
$ export TEMP TMPDIR
```

C シェルの場合：

```
% setenv TMP /mount_point/tmp
% setenv TMPDIR /mount_point/tmp
```

12. ORACLE_HOME および TNS_ADMIN 環境変数が設定されていないことを確認するために、次のコマンドを入力します。

- Bourne、Bash または Korn シェルの場合：

```
$ unset ORACLE_HOME
$ unset TNS_ADMIN
```

- C シェルの場合：

```
% unsetenv ORACLE_HOME
% unsetenv TNS_ADMIN
```

13. 環境が正しく設定されたことを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
$ umask
$ env | more
```

umask コマンドにより値 22、022 または 0022 が表示されていること、およびこの項で設定した環境変数に適切な値が設定されていることを確認します。

8 製品ディスクのマウント

ほとんどの Linux システムでは、製品ディスクをドライブに挿入すると自動的にマウントされます。ディスクが自動的にマウントされない場合は、次の手順を実行してマウントします。

1. ユーザーを root に切り替えます。

```
$ su - root
```

2. 必要に応じて、次のようなコマンドを入力して現在マウントされているディスクを取り出し、ドライブから取り除きます。

- Red Hat の場合：

```
# eject /mnt/dvd
```

- SUSE の場合：

```
# eject /media/dvd
```

この例では、/mnt/dvd および /media/dvd はディスク・ドライブのマウント・ポイント・ディレクトリです。

3. ディスクをディスク・ドライブに挿入します。

4. ディスクが自動的にマウントされたことを確認するには、次のようなコマンドを入力します。

- Red Hat の場合：

```
$ ls /mnt/dvd
```

- SUSE の場合：

```
$ ls /media/dvd
```

5. このコマンドによってディスクの内容が表示されない場合、次のようなコマンドを入力します。

- Red Hat の場合：

```
# mount -t iso9660 /dev/dvd /mnt/dvd
```

- SUSE の場合：

```
# mount -t iso9660 /dev/dvd /media/dvd
```

この例では、/mnt/dvd および /media/dvd はディスク・ドライブのマウント・ポイント・ディレクトリです。

9 Oracle Database Client のインストール

oracle ユーザーの環境を構成した後、次のようにして Oracle Universal Installer を起動し、Oracle ソフトウェアをインストールします。

1. Oracle Universal Installer を起動するには、次のコマンドを入力します。

```
$ /mount_point/client/runInstaller
```

Oracle Universal Installer が起動しない場合、『Oracle Database Client インストール・ガイド for Linux on POWER』で、X の表示のトラブルシューティングに関する情報を参照してください。

2. 次の表に、Oracle Universal Installer の各画面での推奨するアクションを説明します。次のガイドラインを使用して、インストールを完了します。
 - より詳細な情報が必要な場合、またはデフォルト以外のオプションを選択する場合、「ヘルプ」をクリックすると追加情報が表示されます。
 - ソフトウェアのインストール時またはリンク時にエラーが発生した場合は、『Oracle Database Client インストール・ガイド for Linux on POWER』のトラブルシューティングに関する情報を参照してください。

注意： 前述のタスクを完了している場合、ほとんどの画面でデフォルトを選択してインストールを完了できます。

画面	推奨するアクション
ようこそ	「次へ」をクリックします。
インストール・タイプの選択	「InstantClient」、「管理者」または「ランタイム」を選択し、「次へ」をクリックします。
ホームの詳細の指定	Oracle ホームの名前およびディレクトリ・パスを指定します。
製品固有の前提条件のチェック	前提条件の確認がすべて成功したかどうかを確認してから、「次へ」をクリックします。 Oracle Universal Installer は、システムが Oracle ソフトウェアを実行するように正しく構成されているかどうかを確認します。このマニュアルに記載されているインストール前の手順をすべて実行した場合は、すべての確認が成功します。 確認に失敗した場合は、画面に表示された失敗の原因を確認してください。可能であれば、問題を修正して確認を再実行します。システムが要件を満たしていることを確認した場合は、失敗した確認のチェック・ボックスを選択して、要件を手動で確認することもできます。
サマリー	この画面に表示された情報を確認して、「インストール」をクリックします。
インストール	この画面では、製品のインストール中、ステータス情報が表示されます。
コンフィギュレーション・アシスタント	この画面は、「インストール・タイプの選択」画面で「管理者」または「ランタイム」を選択した場合のみ表示されます。 この画面には、Oracle Net を構成する Oracle Net コンフィギュレーション・アシスタントのステータス情報が表示されます。このプロセスの終了時にメッセージが表示された場合は、「OK」をクリックして続行します。

画面	推奨するアクション
Oracle Net Configuration Assistant: ようこそ	この画面は、「インストール・タイプの選択」画面で「管理者」または「ランタイム」を選択した場合のみ表示されます。 画面の情報を確認して、「次へ」をクリックします。 Oracle Net コンフィギュレーション・アシスタントにより、簡易接続ネーミング・メソッドが構成されます。このネーミング・メソッドの詳細は、「ヘルプ」をクリックしてください。
Oracle Net Configuration Assistant: 完了	「終了」をクリックして続行します。
構成スクリプトの実行	プロンプトが表示されたら、指示を読み、この画面に表示されたスクリプトを実行します。「OK」をクリックして続行します。
インストールの終了	Oracle Universal Installer を終了するには、「終了」をクリックし、次に「はい」をクリックします。

10 インストール後の作業

Oracle Client を正常にインストールした後、『Oracle Database Client インストレーション・ガイド for Linux on POWER』で、必須およびオプションのインストール後の手順を参照してください。

11 ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクル社は、障害のあるお客様にもオラクル社の製品、サービスおよびサポート・ドキュメントを簡単にご利用いただけることを目標としています。オラクル社のドキュメントには、ユーザーが障害支援技術を使用して情報を利用できる機能が組み込まれています。HTML 形式のドキュメントで用意されており、障害のあるお客様が簡単にアクセスできるようにマークアップされています。標準規格は改善されつつあります。オラクル社はドキュメントをすべてのお客様がご利用できるように、市場をリードする他の技術ベンダーと積極的に連携して技術的な問題に対応しています。オラクル社のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト <http://www.oracle.com/accessibility/> を参照してください。

ドキュメント内のサンプル・コードのアクセシビリティについて

スクリーン・リーダーは、ドキュメント内のサンプル・コードを正確に読めない場合があります。コード表記規則では閉じ括弧だけを行に記述する必要があります。しかし一部のスクリーン・リーダーは括弧だけの行を読まない場合があります。

外部 Web サイトのドキュメントのアクセシビリティについて

このドキュメントにはオラクル社およびその関連会社が所有または管理しない Web サイトへのリンクが含まれている場合があります。オラクル社およびその関連会社は、それらの Web サイトのアクセシビリティに関しての評価や言及は行っておりません。

12 サポートおよびサービス

次の各項に、各サービスに接続するための URL を記載します。

オラクル社カスタマ・サポート・センター

オラクル製品サポートの購入方法、およびオラクル社カスタマ・サポート・センターへの連絡方法の詳細は、次の URL を参照してください。

<http://www.oracle.co.jp/support/>

製品マニュアル

製品のマニュアルは、次の URL にあります。

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

研修およびトレーニング

研修に関する情報とスケジュールは、次の URL で入手できます。

<http://www.oracle.co.jp/education/>

その他の情報

オラクル製品やサービスに関するその他の情報については、次の URL から参照してください。

<http://www.oracle.co.jp>

<http://otn.oracle.co.jp>

注意： ドキュメント内に記載されている URL や参照ドキュメントには、Oracle Corporation が提供する英語の情報も含まれています。日本語版の情報については、前述の URL を参照してください。

Oracle Database Client クイック・インストール・ガイド, 10g リリース 2 (10.2) for Linux on POWER

部品番号 : B25809-01

原本名 : Oracle Database Client Quick Installation Guide, 10g Release 2 (10.2) for Linux on POWER

原本部品番号 : B25150-01

Copyright © 2005, Oracle. All rights reserved.

このプログラム (ソフトウェアおよびドキュメントを含む) には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段 (電子的または機械的)、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software—Restricted Rights (June 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかるとして使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性 (redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万が一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle、JD Edwards、PeopleSoft、Retek は米国 Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の登録商標です。その他の名称は、他社の商標の可能性があり得ます。

このプログラムは、第三者の Web サイトへのリンク、第三者のコンテンツ、製品、サービスへアクセスすることがあります。オラクル社およびその関連会社は第三者の Web サイトで提供されるコンテンツについては、一切の責任を負いかねます。当該コンテンツの利用は、お客様の責任になります。第三者の製品またはサービスを購入する場合は、第三者と直接の取引となります。オラクル社およびその関連会社は、第三者の製品およびサービスの品質、契約の履行 (製品またはサービスの提供、保証義務を含む) に関しては責任を負いかねます。また、第三者との取引により損失や損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

